

僕の

六つ星スキルは伝説級？

外れスキルだと
追放されたので、
もふもふ白虎と
辺境スローライフ
を目指します

2

Touma Inugami
いぬがみとうま

● 嘴広コウ



アニキ

ルシアを追っている
盗賊団のリーダー。
二人の弟分の面倒を見ている。

タートリア公爵

★★★★★
北方の領地を統治する
タートリア公爵家の当主にして
ルシアの父親。

クエイク

★★★★★
傭兵团をまとめ上げるリーダー。
四人の曲者を従える。

オーガ・コーベン

★★★★★
王都剣士大会の予選に
タチカワス領の剣士として
出場した傭兵。
やたらとライカに絡んでくる。

げんぶ 玄武

カイリーン王国の北方を
守護するとされる聖獣。
白虎と同様に力を失い、
今はただの説りの強いしゃべる亀。

ひやっこ 白虎

カイリーン王国の西方を
守護するとされる聖獣。
かつての力を失ってしまい、
今はただのしゃべる猫。

ニアーメイド

白虎の毛から生み出された眷属。
建築、農業、戦闘は得意だが、
料理については……

ライカ

★★★★★
カイリーン王国の西方を統治する
ホワイトス公爵家の長男。
史上初の六つ星のスキル『ダウジング』を
授かるも、勘当されてしまう。

第一章 撫われたルシア

僕はライカ・ホワイトス。カイリーン王国の西方を治めるホワイトス公爵家の元長男だ。僕はこの国の慣習に従い、十歳の時に王都の神殿で行われたスキルを授かる儀式、神託の儀を受けて、この国が建国されて以来初めての、六つ星のスキルを授かつた。

今までには五つ星までしか確認されていなかつたから、それだけで神殿中が大騒ぎだつた。しかも、未確認のユニーカスキル『ダウジング』というものだつたから尚更だ。しかし、このスキルは謎に包まれていて、まったくうまく扱えなかつた。

そのせいで僕はハズレスキルの落ちこぼれ扱い。

遂には勘当され、ホワイトス公爵家を追放されてしまった。

父から唯一の温情で与えられた、領地の外にあるホワイトス公爵家の別荘（オンボロ）へ行くことになつたのだが……道中森の中で出会つた小さな猫が、なんと四聖獣の一角である白虎だつた。

僕の『ダウジング』はその時偶然に、白虎が求めた“マタタビ石”を探そうとしたことで発動したんだ。

それから、白虎の毛から生まれた眷属のニヤーメイドさんが仲間になつたり、ホワイトス公爵家を解雇された料理長さんと一緒に暮らすことになつたり。更には伝説の鍛冶神と称されたマウラさんが仲間になつたり、北方を治めるタートリア公爵令嬢のルシアが一緒に住むことになつたりと、色々あつて優しい皆と充実したスローライフを送つていた。

その後、魔獣のスタンピードで壊滅しかけたオーレス領の街を救つた僕らは、この領の剣士部隊を率いて、四年に一度開催される、由緒ある王都剣士大会の西方地域の予選へと出場した。

その決勝でホワイトス領に勝利し、予選を突破した僕らは、国王陛下へ謁見し、激励と称賛の言葉を頂いた。

その際に、オーレス領のスタンピード討伐に對しての虚偽の報告について、国王陛下に激詰めされている父上を見た時は、なんだか複雑な気持ちになつたけど。

これで父上を見返すこともできだし、弟のフィンとは和解というか雪解けというか……昔のような仲のいい兄弟に戻るきつかけにもなつたんだと思う。

そしてこれから、その祝勝会だ。

「よし！ 皆！ 思いつきり楽しもう！」

「「おーーーーーー！」」

オーレス子爵や剣士たちが木樽のジョッキを掲げて雄叫びのような歓喜の声を上げる。

オーレス領の剣士たちで溢れる酒場は大いに盛り上がつてゐる。

——バンッ！

しかし、突然、激しくドアが開いた。

いつも冷静なニヤーメイドさんが、珍しく焦つて酒場へと入つてくる。

「ライカ様……大変デス。ルシアさんの姿が見当たりません！」

「なんだつて！ 目を離さないようにお願ひしていたじゃないか！」

その報告に、僕はついニヤーメイドさんを大きな声で責める。

「すみません。ライカ様たちが王宮に行つてゐる間、ワタシたちは買い物にでかけたのデスガ——ニヤーメイドさんに絆縛を聞いた限り、どうやら犯人は計画的にルシアを攫つたに違ひない。

それに、今は責任の所在なんてことより、ルシアを助ける方が先だ。

「よし、ルシアを助けに行こう！」

僕らはオーレス子爵や剣士たちを残して宿屋へと戻ると、急いで準備を済ませ、ルシア奪還のために王都をあとにした。

『ダウジング』—— “ルシア”

言葉にすると同時に、心の中にルシアの姿を思い浮かべる。

ダウジングロッドが光を帯びて動き出す。

この方角にはタートリア地方がある。おそらく彼女はタートリア公爵家の手の者に連れ去られた

のだろう。

ルシアが作った『奇跡の秘薬』で巨万の富を手に入れたタートリア公爵なら、金に物を言わせてあらゆる組織にルシアを取り戻す依頼を出すことができる。

王都剣士大会の予選で戦つた、殺し専門の傭兵団に所属するというオーガ・コーベンも、ルシアを狙うタートリア領以外の者から、ルシア暗殺の依頼を請けていた。凄腕の傭兵を雇つてまで狙うほど、ルシアは多くの者から狙われる存在なんだ。

「ルシアがいなくなつた時間からすると、きっとまだ森の中だろうね。よし！ 急いで追いかけよう」

僕が皆を煽ると、料理長さんが僕の肩に手を置き諭す。

「ライカ坊っちゃん。逸る気持ちはわかりますが、ルシア様は奇跡の秘薬を作るために連れ戻されたはずなので、命が脅かされることはないでしょう」

たしかに料理長さんの言う通りだ。ルシアの命をどうこうすることは考えられないなら、相手の戦力も何もわからないところに無防備に突つ込んでいくのは愚策だろう。

それに、急いだところでマウラさんの愛ロバ、ロバートの足では、追いつけるとも思えない。このペースで進むのだとすれば、タートリア領までは五日ほどかかる。

ルシアを攫つたやつらはきっとロバートより早く移動できる。

僕のスキル『ダウジング』さえあれば、ここからでもある程度彼女の居場所はわかるから、じつくりと作戦を考えながら追いかける方が得策だ。

「うん……そうだね。しっかりと作戦を練らないと籠に飛び込む夏の羽虫だね」

「そうじや、とりあえず予選大会で折れてしまつた刀の代わりに、これを持っておきんさい」マウラさんが馬車の荷物の中から僕が前に使つていた二本の刀を取り出し、渡してくれる。

「ありがとう、マウラさん助かるよ」

僕は再びルシアを目標に『ダウジング』を行う。どんどん距離が離れていくのを感じると、自然と焦りが大きくなつていくのを実感する。

それでもまずは、落ち着いて策を練つてから進もう。

『ダウジング』——『魔獣』『範囲半径二百メートル』

僕は今回の剣士大会での経験を通して、『ダウジング』の範囲が調節できるようになつた。

「皆、気を付けて。この辺りに一匹、魔獣の反応がある」

馬車から僕とニャーメイドさんが飛び降り、戦闘に備え周囲の気配に注意を配る。

ガサガサと草木の音が鳴った。その藪の中に何かいる。

次の瞬間、藪の中から猛然と飛び出し突進してくる、大きな角を持つ牛のような魔獸。

「ニヤ！ アウズンブルが現れたニヤ！」

馬車の中から小白虎が叫ぶ。

僕とニヤーメイドさんが突進してくる魔獸を避けようと、アウズンブルが方向を中途半端に変えて馬車の側面にぶつかった。

ゴンッ！ バキバキ――

「ウニヤー！ こいつは、眼の前にあるもの全部に突っ込んでくるのニヤ！」

アウズンブルの突進で馬車が浮き上がる。

それを見てニヤーメイドさんが攻撃態勢に入る。

彼女は地面を抉るほど強く踏み込み、低い体勢から素早くアウズンブルとの距離を詰めると、伸ばした爪をアウズンブルの心臓に突き刺した。

唸り声と共に巨体は倒れ、アウズンブルは間もなく絶命した。

「あれま、ワシの馬車の車輪と側面が壊れてしまつたわい……」

マウラさんは馬車の状態を確認し、頭を抱える。

「大丈夫デス。このくらいであればワタシが直せます」

建築やものづくりが得意なニヤーメイドさんからすれば、この程度は朝飯前だろう。

彼女は早速馬車の修理に使う木材を調達するために、森の中へと入つていった。

「馬車が直るまではここで休むしかありませんね。それなら私はこの魔獸を捌いて夕食を作りましょう」

料理長さんがそう言つて、ロープでアウズンブルの後ろ足を太い木の枝に括つて、吊り上げる。的確に動脈を切断し血抜きをすると、地面が真っ赤に染まる。

こんな状況ではあるが、恋い焦がれた上質な肉と名高いアウズンブルが食べられると思うと、自然とヨダレが出てくる。

僕は、手際よくアウズンブルの皮を剥ぎ肉を捌いていく料理長さんの姿に見入つてしまう。

「料理長さん、その包丁本当によく切れるね。ひょつとして折れてしまつた僕の刀より切れるかも」

「そりやあライカの刀どちがつて、刀身全てが白虎様の爪じやからな。お前の弟の剣と同じ本焼やきつてやつじやな」

僕が料理長さんに話しかけると、マウラさんが横から答えてくれた。

「やっぱり僕の刀より切れるのか……」

「次はライカの刀も本焼きで作つてやるでな！ 白虎様が両前足の爪を全部くれたらの話じやがの。」

ガハハ

「絶対嫌ニヤ！ 爪を折られるのは痛いんニヤぞ」

話を聞いていた小白虎がすぐに拒絶の意を示した。

「いやいや白虎様。マタタビ酒に酔つてる間にちよちよつとへし折りや痛みは無いですけえ」

既にお酒が回っている小白虎とマウラさんはどちらも譲らない。

「そうだ！ マウラさん。僕、今回の予選大会で気付いたんだ。剣より、トンファーの方が自分の

戦い方に向いているんじゃないかって」

「そいいえばダウジングロッドで戦つた時は驚いたぞ。じゃが、ダウジングロッドじやちいと戦いにくかつたじゃろ？」

「うん。たしかに。もつと太くて、長い方がいいなって思った」

「ふむ。ちよつと試してみるか。本焼きで刀を作るのと同じ量の素材でできそうじやしのう」

そう言うと、マウラさんは小白虎をチラリと見る。

「両前足の爪は嫌ニヤぞ……」

「ライカのためですけえ、我慢してつかあさいよ。ワシも作つてみたいしのう」

「結局自分の創作欲求ニヤアア！」

そんなやり取りをしている間にも、料理長さんは黙々と夕食で食べる肉と、保存用の肉を切り分

けている。

「料理長さん、今日はこのアウズンブルをどう料理をするの？」

以前から美味しいと聞いていた、恋い焦がれていたアウズンブル。妄想の中の料理が期待値をぐんぐんと上げる。

「野営で凝つたものはできませんし。東方の国の鍋料理『スキヤキ』にしようと思ひます」

「スキヤキ？ 昔から料理長さんの料理で育つたけど、食べたこと無いなあ」

「ホワイツス公爵は東方の料理がお嫌いでしたので、お出ししなかつたのでございます」

料理長さんが夕食の準備に取り掛かつてすぐ、ニヤーメイドさんが木材を調達して戻ってきて、馬車の修理を始めた。

小白虎とマウラさんは酒盛りを楽しみ、僕はダウジングロッドを使った戦いを想定して、枝にぶら下げた丸太を相手にして特訓をした。

このダウジングロッドでも戦えないことはないが、もつと太いものの方が、『ダウジング』を使つての戦闘に向いている。

刀と違つて、相手を意図せず真つ二つ……なんてこともならなそuddash;だし。

「皆さん。食事の用意ができましたよ」

料理長さんが呼びに来た。特訓していたのもあって、空腹がピークに達したところだった。
鉄の平たい鍋の中に、濃い色の甘い汁。ネギや葉物の野菜や根菜が並び、薄く切られたアウズン
ブルの肉が泳いでいる。

なんていい香りなんだろう。食欲をそそり、皆のお腹が一斉に鳴りだす。

「よろしければ、鶏卵を溶いたものにつけてお召し上がりください」

「「いただきまーす！」」

皆が一斉に卵液に絡めた肉を口に運ぶ。

「「美味あああい！」」

僕らの声は、夜の森に狼の遠吠えのように響き渡った。

「おおおおお。この汁がしみたキノコ……火酒が進むわい」

「ウニヤ。わかつているなドワーフ。マタタビ酒にも、ものすごく合うニヤ」
マウラさんと小白虎、酒飲みたちにも大好評だが、もちろん酒を飲まない僕とニヤーメイドさん
も舌鼓したづみを打つていて。

「甘いものがお米に合うなんて……びっくりだよ。いくらでも食べれちゃうぞ」

「ワタシ、料理長サンの眷属になりたいデス♪」

無心でスキヤキに食らいつく皆の食べっぷりを見て、料理長さんは嬉しそうに微笑んでいる。

「喜んでいただけて私も嬉しいです。たくさんありますので、どんどんお召し上がりください」
僕らはスキヤキに夢中になり、料理長さんが追加するアウズンブルの肉を次々と食べていった。

「アニキ！ いい匂いはこっちの方からするでがんす」

食事を楽しんでいると、森の中から三人組の男たちが現れた。

「またお前らか！」

アニキと呼ばれた男は、僕らを見て顔をしかめた。

「お前たちは盗賊の……」

僕は彼らを睨みながら双刀に手を掛ける。

「聞いて驚けでやんす。俺たちや泣く子も黙る白虎団びやくこだんでやんす！」

細身の盗賊が名乗った。

白虎……団？

「白虎団？ エット、もしかしてその名つて四聖獣の白虎から？」

僕が聞き返すと、アニキがニヤリと口角を上げながら言う。

「そうだ。白虎団。かつこいいだろう。俺様が付けた崇高な名前だ」

「ふふふ」

「アニキ！ このガキ、今笑つたでやんす」

子供たちが付けそうな名前に思わず笑つてしまつた。しかも、白虎とは。盗賊に自分の名前を使われるなんて、小白虎も嫌だろうな。

僕はニヤニヤしながら小白虎に目を向けると、突然小白虎が叫んだ。

「いい名前ニヤ！」

「いや、喜ぶのかよつ！」

僕は思わずツツコミを入れる。

「「猫が喋つた——！」」

白虎団の三人組が驚いて腰を抜かす。

「この猫は世にも珍しい喋れる猫なんだ。ところで、何か用？」

小白虎については適當な説明で濁し、それよりも気になる白虎団の目的を探る。

「誘拐されたタートリア公爵令嬢を追つていたら、いい匂いがしてきてな」

「犬並みの嗅覚を持つおでが、匂いを辿つたらここだつたでがんす」

「お前ら、その料理をよこすでやんす！」

連携の取れた簡潔でわかりやすい説明だ。見事にセリフを分担している。

「ふざけるな！ 誰が盗賊なんかに食べさせるもんか」

ルシアを狙つていたやつらに、食事を分けてやる必要なんて無い。実力行使に出てきたつて、返り討ちにしてやればいいだけだ。

「まあ、いいじやニヤいかライカ。お前たち、一緒に食つていくニヤ」

「なんでだよ小白虎。コイツらはルシアを追いかけ回してる悪党だよ」

「コイツらはネーミングセンスがいいからニヤ。褒美ニヤ」

小白虎は、自分が崇拜されていることが相当嬉しかつたのだろう。

「じや、じやあお言葉に甘えるでがんす」

そうして一つの大鍋を、僕たち一行とルシアを狙つている三人組の盗賊が囲む。実にシユールな絵面だ。

「美味いっ！ 美味いぞ！ なんだこの肉は」

アニキが目を輝かせて感激している。

「これはニヤ、アウズンブルつていう魔獸ニヤ」

「猫ちゃん、それって、あの恐ろしい牛みたいな魔獸でがんすか？ 一体どうやつて……」

肉を頬張りながら、ガヌスという太つた盗賊が小白虎に尋ねると、ニヤーメイドさんが誇るよう

に応えた。

「ワタシが仕留めまシタ」

「何？ こんな女のメイドごときが仕留めたんじゃんすか!?」

痩せた盗賊、ヤンスがニヤーメイドさんをジロジロと舐め回すように見る。

「信じられないなら、そこの太った男を同じように仕留めてみせまシヨウカ？」

ニヤーメイドさんは殺氣を滾らせヤンスを睨む。

「待つて待つて！ ニヤーメイドさん、むやみに人を殺しちゃいけないよ」

僕は、必死にニヤーメイドさんをなだめ、他の話題を切り出した。

「おじさんたちはなんでルシアを狙っているの？」

「おじ……もちろん、金のためだ」

「あの娘を売り飛ばしや、一生遊んで暮らせるくらいの金が手に入るでやんす」

アニキが答える、ヤンスが補足する。

「お金なんかのために……人の人生をなんだと思ってるんだ」

これだから悪党は嫌いなんだ。自分のためなら人が不幸になろうが関係ないという考えに腹が立つ。

「ふん。お前のような貴族の坊っちゃんにはわからんだろうな。俺様たちがどんなに過酷で貧しい暮らしかしていたかなんて」

アニキは冷たい目を僕に向け、そう言つた。

「俺様たち三人はな……」

「アニキは火酒が入った杯を片手に語り始めた。

「貧乏だからって悪いことをしていいわけじゃないだろ」

「貴族の金持ちでも悪党はたくさんいるじゃないか。タートリア公爵だつて同じだろ」

僕は正論をぶつけられて言葉に詰まる。

「俺様たち三人はな……」

「アニキは火酒が入った杯を片手に語り始めた。

第一章 白虎団

カイリーン王国の東方、リユート地方。その東端のスラム街。

孤児だった俺様たち三人はそこで育った。

暗い路地裏に座って、ただ夜になるのを待つ。

グウッと腹の音が鳴るが、それが誰の腹の音かわからないくらい飢えていた。

「アニキ、おで腹が減つたでがんす」

「俺もでやんす」

弟分のヤンスとガンスは俺様が面倒を見ている。

「もう少し我慢しろ。あとで俺様が盗んできてやるから」

日が落ちると、薄汚れた俺様たちの服は闇に溶け込み盗みがしやすい。まさに俺様たちの時間だ。もし捕まつたら大人には敵いつこない。

なるべく成功率の高い日没後を狙つて盗みを働いた。この日もそうだった。

「お前たち、パンを盗んできてやつたぞ」

「アニキ……その顔」

「ああ、ドジ踏んじまつてな、店の親父に殴られた」

「ごめん、アニキ。おでたちのために」

「気にするな。このくらい、お前たちの腹がふくれるなら安いもんだ」

「うう……アニキ」

これが俺様たちの日常だった。

「アニキは俺たちより一つ年上だから、今年で十歳でやんすね」

パンを食べ終えると、唐突にヤンスが聞いてきた。

「ああ。それがどうした?」

「町の方の子供たちが言つてたでやんすけど、十歳になつて神託の儀つてのに行くとスキルが使えるようになるでやんす」

親がいる子供はいいよな。俺様たちとは違つて親の金で王都まで馬車を出してもいいんだ。だから俺様たちみたいな孤児は、スキルを持たないまま奴隸のような人生を送る。

まったく世知辛い世の中だ。生まれた時点で負け組が決まつたようなものさ。

「ああ。でも王都まで行かなきやならないんだ。俺様たちに王都に行く手段は無い」

「でも、スキルがあれば、アーティスチックは強盗でも殺しでもやり放題で、金持ちになれるとやんす」

バチン——

俺様はヤンスを思いつき殴りつけた。

「殺しだと？ 俺様たちの親は罪も無いのに貴族どもに殺されたんだぞ。やつらの同類になる気がか！」

「ふけじざー、つてやつて殺された親の仇を殺してやつたじでやんす……つー」

「だめだ！ 俺様たち三人、殺しはざ法度だ！」

ヤンスとガンスが寝静まつたあと、俺様は壇の廃屋を出て、雨の降る「」捨て場にやつてきた。

俺様は雨が好きだ。体と心の汚れを洗い流してくれるよつた、そんな気がするから。

「スキル……か……」

俺様たちのような「」の山に囲まれた「」のよつた人間でも、いいスキルさえ授かれば、成り上がるかもしね。

雨が上がつた。日が昇りかけて空が白んでくる頃、決意が固まつた。

「おいー、お前たち起きろー！」

「んん。アーティスチックしたでやんすか？」

「おで、まだ眠いでがんす」

「旅の準備をしろ。王都に行くぞ」

「王都でやんすか！ アーティスチックもさかスキルを」

「ああ。俺様は、なんとしてもいいスキルを授かつてやるぞ」

王都までは、とても子供が歩いて行ける距離ではない。

それに、今から歩いても神託の儀が行われる六月六日には間に合わない。

「でも、あと十日でどうやって王都まで行くでやんすか？」

俺様は、フフンと鼻から息を出し笑つ。

「いい策があるんだ。お前ら一週間くらい断食する覚悟はあるか？」

この町の平民の子供たちは、貴族の子供とは違い、丈夫な幌の付いた大きな馬車に乗り、皆で一緒に王都へ向かう。

そこで俺様はこの大きな馬車を利用することにした。

「アーティスチックは天才でやんす」

「これなら金払わずに王都まで行けるでがんす」

ヤンスとガンスが初めて乗る馬車に興奮している。

と言つても、普通の乗り方じゃないのだが――

「大人数が乗る馬車つてのは、荷台の車輪のシャフトが長いんだ」

俺様の策とは、このシャフトとシャフトに板を渡して空間を作り出し、そこに忍び込むところなのだ。

ただ、荷台と違つてサスペンションが効いていない分、乗り心地が最悪なのと、自由に乗り降りができないことが難点だ。

それに、持つていける食料にも限りがあるから、飢えとの戦いも待つてゐる。俺様はまだしも、果たしてヤンスとガンスが耐えられるかが心配だ……

「アニキ、おでションベンが漏れそうでがんす」

予想通りの展開。馬車に忍び込んでいる身だから、もちろん「御者さん、用を足したいから止めてください」なんて言へるわけもない。

「我慢するか、その体勢でしの」

「む、難しいでがんす……」

ガンスは荷台の下で、無理やり用を足そうと奮闘する。

「わっ！　こっちに飛ばすなでやんす」
ガンスから放出される飛沫にヤンスが騒ぐ。

「（シーツ！　お前ら、静かにしろー！）」

一日何度かは、こんな感じだ。

それに、食べ盛りの俺様たちだ。普段から飢えには慣れていふとはいえ、それでも限界はある。

「アニキ、おで腹が減つたよ」

「あと四日間だ。我慢しろ」

「ガンス。お前もう食料なくなつたでやんすか？」

「うん。腹の虫が騒いで收まらなかつたでがんす」

大食いのガンスは特に辛いだろう。

「しょうがねえな。ほら、俺様の食料を分けてやるから静かにしてろよ」

「アニキ、ありがと。でもアニキのご飯が……」

「大丈夫だ。俺様は腹が減つてないからな」

そんなこんなで今日も口が暮れて、辺りが暗くなつてると馬車が止まる。

きっと今日は、ここで野喰をするのだろう。

馬車には一人の護衛が同行していた。もし彼らに見つかってしまえば、最悪殺されることだつて

考えられる。

慎重に行動しなければならない。

しかも、この護衛たちは予想以上に有能だった。つい今までの四日間、俺様ですり馬車からパンの一つも盗むことができなかつた。

グウと俺様の腹が鳴る。

「あはは、アーチの腹の虫が泣いたでがんす」

「おいガンス！ お前がアーチの食料を全部食つたからでやんすよ」

「あ、そうだった。ごめん、アーチ」

「……ああ、大丈夫だ。気にするな」

更に二日が経つた。

王都まであと二日。水だけで凌ぐのは、俺様はともかくヤンスとガンスは、そろそろ限界だらう。今日こそ食料を調達しなければならない。

夜、御者や乗客の子供たちが眠りについた。

交代で睡眠を取る一人の護衛は、一人が馬車の横で焚き火を囲み座つてゐる。

「よし、俺様が盗つてくる。俺様に何があつても、お前たちはここを動くなよ

「了解でやんす」

小声で指示を出すとヤンスの返事だけが返つてくる。

どうやらガンスは寝ているようだ。いい気なもんだ。でも、それでいい。腹が減つたと癪かんしゃくを起こされても困るしな。

俺様は馬車の陰から這い出し、布団の敷かれた幌の中へと忍び込む。寝ている子供たちの合間を縫つて、食料が入つてゐる箱を目指す。

よし。これだな。そつと木箱を開くと、中にはたくさんの食料がある。

大きなパンを六つ。リンゴとチーズを三つずつ。

よし、これだけあれば王都まで耐えられるだろつ。

俺様は両手いっぱいに食料を抱えた。

だが、馬車の下へ戻るうとした瞬間、抱えていたパンが一つこぼれ落ち、それが子供の顔に当たつてしまつた。

「んん。え、誰？ きやああ！」

まづい。

叫び声に気付いた護衛が、すぐに荷台の後方を塞ぐ。

「誰だ！ お前は。そこを動くな」

動くなと言われて動かないわけにはいかない。ここで捕まることはできないんだ。

御者台の方から馬車を飛び出した俺様は、盗んだ食料を馬車の下へと投げ込み、森の方に走った。

「おい… 起きろ！ 泥棒だ」

護衛がもう一人を起こして俺様を追いかけてくる。

必死に逃げる。心臓の鼓動が速い。肺が破裂してしまった。

全力で走っているからなのか、恐怖からなのか、心臓が大太鼓を鳴らしているかのような感覚だ。護衛たちはそこそこ重厚な鎧を着けていた。篠手やすね当ても着けているところを見ると、少なくとも全部で二十キログラムはあるだろう。

それならさすがに俺様でも護衛たちから逃げ切れる。

しばらく走つてから振り返ると、もう護衛は走つてきていなかつた。

ヤンスたちは馬車の下に投げ込んだ食料を無事に回収できただろうか。

今更馬車へ戻るなんて危険なことはできない。

俺様はともかく、ヤンスとガンスが無事に王都へ着けるよう祈るしかない。

そして、俺様もあと一日で王都へ着かなければならぬ。

地図は頭に入ってきた。ここからだと王都まで寝ずに歩けば、ちょうど一日で着けるはずだ。

道すがら、食べられるものを探そう。幸い森だから、何かしらはあるはず。

……くそ！ 苛つくる。

歩き出したはいいものの、空腹で精神的、体力的に厳しい状態であることを実感する。

なぜ、こんな辛い思いをしているんだ。誰のせいだ？

いや、そんなことを考えるな。無心で歩き続けるんだ。

だめだ、考えようとしなくとも頭を過る。相当精神的に弱っているのかもしれない。

あれからどれくらい歩いたのだろうか。朝を迎えて暗くなつて明るくなつて……

そうか、もうすぐ、丸一日か……

足の裏が、ふくらはぎが、太ももが、尻が痛い。

そして、何より腹が減つた。少しでも気を抜けば意識が飛んでしまった。

辺りを見ると、次第に鬱蒼とした森の木が無くなつていき、空が広くなつた。

そして遠くに王都の城壁が見えた。

無限に続くのではないかと思つぽじの道のりを歩ききつたのだ。

「アーキーーー！」

「おーい！ アニキー！」

王都の入口からヤンスとガンスの声が聞こえる。

良かつた。あいつらは無事に王都へ着いていたんだ。

「アニキは絶対王都に辿り着くって、俺たち話してたんでやんす」

「おで、アニキが腹減つてると思つて、食べ物をたくさん盗んだんでがんす」

ガンスが布に巻いて担いでいた、パンとミルク、チーズにソーセージを見せてくる。

「ああ、ありがとう。ありがとう。お前たち」

その後、俺様はスキルを授かり拠点を王都周辺のスラム街へと移した。

そしてその更に一年後、ヤンスとガンスもスキルを授かる。

「ヤンス、ガンス、知つてるか？ ここから西方の地域はな、昔、四聖獣の白虎が守護していたんだ」

「おとぎ話の、あの白虎でやんすか？」

「ああ、四聖獣の中でもな、白虎は民に豊かな暮らしをもたらしたんだとさ」

「豊かな暮らししかあ。おで、豊かになりたいでがんす」

「そうだ、ずっと『ミ縫めのようなどころで飢えと共に育つてきた。

いつかきっと、豊かな生活を手に入れてやる。

「だから、白虎にあやかつて、俺様たち三人は今日から、『白虎団』と名乗るぞ！」

それから数年、白虎団はスラム街を仕切る盗賊三人組として名を馳せていった。

◇◆◇

「……と、話が長くなつてしまつたな。だから俺様たちは殺しはやらねえ。盗み専門つてわけだ」

「アニキさんの壮絶な過去の話に聞き入つていた。
僕は貴族の家に生まれて何不自由なく生きてきたけど、世の中には、この三人のように恵まれない人たちがたくさんいるんだな。

「うう。アニキさん……いい人だつたんだね」

「ええ、ライカ様。私めも感動してしまいました。さあ、アニキさんたち、もつと料理を召し上

がつてください」

僕と料理長さんとマウラさんは、アニキさんが話す白虎団の生い立ちに胸を打たれた。

「そうか、やっぱりいいネーミングセンスしてるニヤ！ お前たち」

「白虎様を崇拝するとは感心デス。見直しまシタ」

小白虎とニャーメイドさんは、僕らとは違う部分に感心しているようだ。

「お前らは馬鹿か！ 俺様たちは殺しをしないだけで、盗みは腐るほどしている悪党だぞ……」

「そうだつた！ 一度はルシアを攫つた悪党だつた。やっぱ肉返して」

「もう腹の中だ。それは無理に決まつてるだろ」

僕らは、ひょんなことから白虎団という盜賊と打ち解けてしまつた。

「肉、ありがとうな」

「美味かつたでやんす」

「飯の恩は忘れないでがんす」

幼少の頃から飢えて育つてきた彼らの感謝の言葉は重く心に響いた。

「アニキさんたちはこれからどうするの？」

「もちろん、今すぐタートリア公爵令嬢を奪還しに行く。俺様たちの戦馬車なら一日でタートリア領に行ける」

速いな、ロバートと戦馬車チャリオットではそんなに速度が違うのか。

「ニャーメイドさん、僕たちの馬車はいつ直りそう？」

「明日の朝には」

うーん。明日の朝からタートリア領へ向かつたとしても、ロバートの速度だと四日以上かかるてしまう。

少しでも早くルシアを助け出したいのに……

「ねえ、アニキさん。僕一人ならその戦馬車チャリオットに乗れるよね？ 僕も連れてつてよ」

「なんだと……？」

僕の突然の申し出に驚くアニキたちだが、その後の判断は早かつた。

「いや、剣士大会で観たお前の強さは、何かに使えるかもしれないな。お前、名前は……」

「ライカ！」

「よし。ライカ！ 来い」

僕はルシア奪還のため、白虎団と共に行動することに決めた。

他の皆は一度屋敷へ帰り、僕の武器を作つてからタートリアで合流することになつた。

「皆と合流する前にルシアを奪還できていれば、手紙で知らせるよ。このさつき引っこ抜いた小白虎の髭ひげがあれば、『ダウジング』で遠い場所に飛ばせるから、手紙を髭に結んで飛ばすよ」

「ちゃちやつと白虎様の爪をへし折つて作つちやるけえ待つとれ！」
マウラさんが力強く言つてくれるけど、小白虎には少し申し訳ないな。
「ニヤニヤニヤ……」

「じゃあ、行つてくる！」

僕が言い終えると、戦馬車はすぐに動き出す。

僕は初めて二頭の馬が引く戦馬車に乗つたのだが、その速さに驚いた。
「振り落とされるなよ」

「うん」

夜通し走り続け、随分距離を稼げただろう。東の空が白んでいる。
森の朝靄で視界が少し悪い。

馬を休憩させるために戦馬車を停めた場所の先は分かれ道だ。

「さてヤンス。どつちだと思う？」

「うーん。こつちでやんす」

アニキさんの問い合わせにヤンスさんが答える。でも、それよりこつちの方が正確だ。

『ダウジング』——“ルシア”

「何をしてるでやんすか？」

「これが僕のスキル『ダウジング』さ。うん、こつちの道だ」

「へえ、俺が選んだ方向と一緒にやんす」

「へへへ。随分便利なスキルさ。僕を連れてきて良かつたでしょ」

◆◆◆

タートリア公爵領を進む白い馬車には、外から鍵がかかっていた。

馬車はタートリアの街を進み、幅の広い激流の川の前で停まつた。

川の対岸にはタートリア公爵家の大きな要塞のよつたな屋敷が構える。

護衛の剣士が合図を送ると、大きな歎車が回り出し、激流に橋が架かつた。

護衛隊長は先行して報告のために、タートリア公爵がいる執務室へ向かつた。

「やつと捕らえたか。随分時間がかかつたな」

分厚いマントに身を包むタートリア公爵が不機嫌そうに文句を言つと、護衛隊長が申し開きをする。

「申し訳ありません。どうやらホワイトス公爵令息が匿つていたらしく

「なんだ？ あの四つ星のレアスキル持ちか？」

「いえ、勘当された長男のことです」

「六つ星のユーネクススキルか……噂ではスキルを使いこなせない無能だと聞いてあるが」

「いえ、それが……王都剣士大会の予選を突破するほどの実力でして」

「むむ。そうか……念のため、ルシアの誘拐犯として指名手配書を出しておけ」

「はっ！」

その後すぐにタートリア公爵領のあちこちにライカの人相書きが貼られる、街は大騒ぎになつた。

「この少年がルシア様を誘拐したのか！ 許せない」

「またルシア様を狙つてくる可能性があるって話だぞ」

タートリアの街の人々が、貼り出されたライカの人相書きの周りに集まり、ライカがルシアの誘拐犯だというテーマは広がつていつた。



「もうすぐタートリア領だ。ライカ、『ダウジング』でルシア嬢の位置をもう一度確認しろ」

「うん。わかった」

僕はアニキさんの指示通り『ダウジング』を発動。

ダウジングロッドはタートリアの街の方向を指している。

「うん。間違いない」

「よし。それならまずは屋敷の近くまで行つて、ルシア嬢の詳細な場所の特定だ」

アニキさんがテキパキと指示をくれる。

「いきなり潜入するんじゃなくて、まずは調べるんだね」

「当たり前でやんす！ 俺たちはプロでやんすから」

僕たちはタートリアの街へ入り、旅人用の厩舎に戦馬車を預ける。

「お、お客さん。戦馬車なんて珍しいな。剣士さんかい？」

「ああ、そんなんところだ」

「子連れの剣士さんなん……ん？ まあいいか。たしかにお預かりしますよ」

厩舎の世話係は首を傾げながら馬を木の柵に結ぶ。

「宿屋は偵察のあとに決めるしよう」

僕らはアニキさんを先頭に街中を歩く。

ホワイトスの街より景気が良さそなのは、ルシアが精製した奇跡の秘薬の恩恵なんだろう。

街の様子をキヨロキヨロと見回す僕に、ヤンスさんが注意する。

「おい、ライカ。あまりキヨロキヨロするなつて。田舎者いなかものみたいでやんす」

「ぐへへ。皆がライカのことを見てるでがんす。田舎者がバレたでがんすよ」

「その時、突然アニキさんが小声で僕らに話しかける。

「おい、お前ら……引き返して街を出るぞ」

「なんで？」

「あの貼り紙を見る。ライカ……お前、指名手配されている」

「え、なんで僕が……」

街の人々が僕を見ていたのは、あの貼り紙のせいか。

「まずいな、衛兵たちが向かってくる」

誰かが通報したのだろう。衛兵たちはこちらに向かって走ってくる。

「ヤンス、ガンス、ライカ！ 走れ！」

僕らはすぐさま踵きびすを返し、街の出口に向かって走って走る。

しかし、もうすぐで街の出口というところで、衛兵が出口で待ち構えていることに気付く。

「くそ！ 挟まれたか……こつちだ」

アニキさんの指示で路地裏へと入ったはいいが、どうやつてこの窮地きつぱちを脱すればよいか僕には思

いつかない。

「この路地に入つたぞ！」

衛兵たちの声がどんどん近づいてくる。

「しようがねえ。お前ら俺様の手を握れ」

「え？」

「いいから早く！」

アニキさんの手に触れると、手が光り出し、僕たちの体を覆い始めた。

『幻』——『幻影』“ダートリアの衛兵”

僕らの体は光に包まれ、次の瞬間、衛兵へと姿を変えた。

「この路地に指名手配の少年と仲間が入つて来ただろう。どこへ行つた？」

衛兵が話しかけてくる。僕が捜し人だと気付いていないようだ。

「なんだと！ 僕たちは逆の方から來たが見ていないぞ」

アニキさんが衛兵のふりをして受け答えする。

見事な演技力だ。

「そうか！ よし、他の路地も徹底的に探すぞ」

僕を追つてきた衛兵たちが去つていく。

「アニキさん……これは一体？」

「これがアニキのスキル『幻』でやんす」

ホワイトス家の書庫にある、今までに出現したスキルが載つている『スキル全集』にはこんなスキルは記されてはいなかつた……

「ねえ、アニキさん。これってユニークスキルじゃないの？」

「なんだ？ それは。そんなことより、とにかく今はこのまま街の外に脱出するぞ」

出口を固める衛兵のラインは、街の外を搜索するふりをすることで、なんとか突破できた。

少し離れてから、アニキさんがスキルを解除する。

「だつはああ。疲れた。さすがに四人分の幻影を作るのはキツイな」

アニキさんは木にもたれて座り込んだ。

「それでも、アニキさんのスキル『幻』だけ？ すごかつたね」

「ああ、俺様たち盗賊としては便利なスキルだな」

「星はいくつなの？」

「それはわからん」

「え？ 神託の儀で司祭様が宣言するでしょ？」

「ああ、俺様たちはちょっと特別でな……夜中、神殿に忍び込んで勝手に神託の儀を行つたから、



よくわからねえんだ」

「俺様たちは戸籍つてやつがねえでやんすから、他のやつらみたいに神託の儀に参加できねえでやんす」

「そうか、この国には事情があつてスキルを授かれない子供もいるんだな。」

「おではちょっと力持ちになるスキルでがんす。でも、使うと腹が減っちゃうでがんす」

「あはは。うん。それはなんか想像できるよ。ヤンスさんは?」

「俺はな……聞いて驚けよ!」

「う、うん」

ヤンスさんも珍しいスキルを持つているのかもしない。

たつた三人で盗賊団として名を馳せるだけはあるのだから。

「実はな……未だになんのスキルかわからぬでやんす! へつへつへつ」

「えーーーー!」

しばしの休憩。

座り込むアニキさんの周りに集まり、作戦会議が始まった。

まさか僕が指名手配されているなんて思つてもいなかつた。アニキさんのスキルが無ければ捕まつていただろう。

「さて、どうしたものか……」

「そうだ! いいこと思いついたよ!」

アニキさんのつぶやきに、僕はちょうど聞いた案を伝えようと口を開いたのだが。

「先に言つておくが、俺様の『幻』は時間制限がある。町の入口から使用したら、公爵家に潜入するまでもたないぞ」

「そう……なのか」

以前、白虎団の皆が潜入した時は、夜会が行われた日だつたらしい。

屋敷に続く橋の手前から『幻』で貴族になりすましたらしいが、今回はその手は使えない。

各々が頭を悩ませ、アイデアを振り絞る。

「オーレス子爵領の剣士部隊に応援を頼むつてのは……」

僕は思いついたことを口に出してみる。

「ライカ、お前は戦争をしようとしてるのか? 相手は北の地の最大勢力を誇るタートリア公爵領だぞ」

「だ、だよね……参つたな。打つ手なしだよ」

その時、人差し指の先で額をコツコツと叩いていたヤンスさんが、口を開いた。

「何も、街の中の橋を渡つて屋敷に入るだけが、潜入する方法つてわけではないでやんすよ」

「どういうこと？」

「公爵の屋敷は激流の川に囲まれているでやんすが、街の外にあたる、裏側から川を渡ることができれば、街の中を通らなくても公爵家の敷地に入れるでやんす」

「それだ！ 早速見に行つてみようよ」

すぐに僕らはタートリア公爵家の屋敷の西側へと向かつた。

第三章 北の四聖獸

——激流の川が轟音と共に眼前を流れている。

「いやいや！ 絶対無理いい！」

僕が想像していたよりも激しい川の流れに、これは断念せざるを得ない。

これは筏いかだを作つてとか、そういう次元ではない。

当然、どんなに泳ぎが得意でも対岸に辿り着くことはできないだろうし、橋を架けるにしたつて何ヶ月もかかつてしまう。

タートリア公爵の屋敷は、難攻不落の要塞と言われるわけだ。

「屋敷を囲う壁にもかなりの人数の見張りが配置されているな……これは完全にお手上げだ」

「そうしたら、次に公爵家へ貴族たちが集まる日程を調べて、綿密に計画を立て直す必要があるのでやんすね」

「ああ、これは時間がかかりそうだな」

「ねえ、アニキたち……おで……」

作戦の中斷を余儀なくされ、皆が俯く中、川を覗いていたガンスさんが振り向き、いつになく真面目な顔で僕らに話しかける。

「どうした、ガンス。珍しくいい案が思いついたのか？」

「いや、おで、川を泳いでる魚の魔獸を見てたら、腹が減ったでがんす」

「かーつ！ お前はやつぱりガンスでやんすね。食うことしか頭に無いでやんす」

川を改めて覗き込むと、この激流に逆らって泳いで登っていく、バーサクソモンという魚の魔獸が見えた。この魔獸はタートリア領の名産品の一つだ。

激流にも負けずに泳ぐその筋肉は、しつかりしていて、歯ごたえがあり絶品らしい。

「この激流を泳げるのなんて、あの魔獸くらいなもんだな」

「あの魚の魔獸の背に乗って向こう岸まで渡ればいいんだけどなあ」

「あんなの手懐けられるわけないでやんす」

アニキさんも僕も現実逃避気味に呟く。川の激しい流れを何度も、渡る手段が思い浮かばない。

出直すしかないか。

「おいガンス！ いつまで魚の魔獸を見てる。どうせ捕まえることはできないぞ」

「違うでがんす、アニキ……何かが川を泳いでるでがんす」

「なんだつて！」

言われて川を見れば、激流の中を悠々と泳いでこちらの岸に上がる一匹の亀が、のそのそと岩の上に登り日光浴を始めた。

あんなに小さな亀なのに、どうしてこの川を泳げるんだろう。

僕はその姿を「あぜん」としながら見つめる。

「わいどん、なん見よつとか！」

「「亀が喋ったああ！」」

こちらを見上げながら、小さな亀が口を開いた。

「わいどん、しゃーしかね。そぎやん喋つとうが珍しかと？」

「訛りすごつ！」

亀が喋ったこともそうだが、その強い訛りにも驚く。

「あ、それより、君はなんであの川を泳げるの？」

「あぎやん緩やかな川ば泳げるの当たり前ばい」

「いや、すごいよそんなに小さい体で」

「そぎやん言いよつとも仕方なかね。わい、この川の名前知つどうと？」

北の地のことはまつたくわからない僕の代わりに、ヤンスさんが答えてくれた。

「玄武川でやんす」

「正解ばい！ そして、その玄武ってのはおいのことばい」

「へ？ おとぎ話の玄武様のことやんすか？」

「ほう、^俺おいのことがちゃんと伝説になつとつとか。感心感心」

「喋れるだけの小さい亀が玄武様なはずないでやんす。まったく頭のおかしな魔獣でやんすね」

「コラ！ 人間風情が聖獣のおいを魔獣扱いするとは、生意気ばい」
ヤンスさんはそう言うが、僕はこの亀が嘘を言つては思わない。白虎だって小型化してしまつたんだ。同じ四聖獣である玄武だってこの姿になることは十分あり得る。
……もしかして！

「ねえ、僕マタタビ石を持つてるけど……いる？」

僕はダウジングロッドに付いているマタタビ石を指差す。

「あん？ マタタビ石？ そぎやんもん食らうわけなからうもん。白虎やあるまいし」

「聖獣にはマタタビ石ってわけでもないのか……でも、白虎のことを知つてるんだね！」

「よう知つとうよ。あんだけ猫とは古い仲やけんが」

「やっぱり本当に聖獣の玄武なんだね！ マタタビ石じやなければ何を食べるの？」

玄武は遠い昔を思い出すような目をしながら、静かに言う。

「おいが食べるんは^{ペツヒョウセキ}鼈甲石やね」



小白虎たちがライカの屋敷の談話室でお茶をしてると、料理長がやってきた。
「皆さん。ライカ坊っちゃんから手紙と地図が届いております」
料理長が白虎のヒゲに巻かれた手紙を広げ、読み上げる。

——皆へ

無事屋敷に着いた？

僕は白虎団とタートリアの街に着いたよ。

だけど聞いてよ、なんと僕はルシアを誘拐した罪でタートリア領で指名手配されてたんだ。

それでも諦めずに、どうにかしてタートリア公爵家の屋敷に潜入しようと考えてたんだけど、

激流の川を渡れなくて……

そんな時、偶然出会ったんだ。四聖獣の玄武に。
小白虎みたいに小さくなつててさ。

そこで、マウラさんにお願いなんだけど、もしマウラさんが持つてる鉱石の中に“**籠甲石**”があれば持ってきてほしいんだ。

僕の方でも探してみるけど、もしあればお願ひ。

僕たちはタートリア領の南西部。湖の畔(ほとり)にある白虎団の拠点にて待ちます。

——ライカ

「二ヤ……あの化け亀、まだ生きてたの二ヤ」

遠い昔を思い出すかのように宙を見つめる小白虎。

「ほう、籠甲石か。たしか何個があつたような気がするが、どうじゃったかのう……ちよつぢライ

力の武器も出来上がつたところじゃし、皆で届けに出かけるかのう」

◇◆◇

「なあ 小玄武」

「コラ、ライカ！ 誰が小玄武やと！」

「ここらへんには籠甲石つてやつ無さそうなんだよ」

「そいぎ川ば渡れんつちやね」

あれから数日、僕たちはこの拠点である湖畔の小屋に滞在している。
だんだん小玄武の訛りにも慣れてきた。

「あーあ。やることが無いと腹が減るでがんす」

状況の進展は何もなく、僕らは連日、無為な時間を過ごしてしまっている。

「お前はいつでも腹が減つてるだろ」

「それならアニキ、食料を盗みに行こうでがんす」

「ここをどこだと思ってる。こんな森の中で誰から盗むんだ」

「人間は飯ば食わんといかんけん大変やろうばつてん。それが人間に生まれた性(さが)ばい」

そんな話をしていると、小屋の外から声が聞こえてきた。

「シツ！ 小屋の外に誰かいるぞ、お前ら声を出すな」

すぐに僕は息を潜め、耳をします。

「おお。ここじやここじや。多分この小屋のことじやろ」

「あ、この声はマウラさんだ！」

ドアを開け、僕は飛び出した。

たつた数日ぶりなのに、皆の顔が随分と懐かしく感じる。

立ち読みサンプル
はここまで